

第113回 「卒業ソング」でブレイクした 美少女アイドルたち

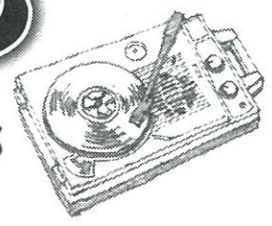
春3月といえば、卒業証書を持った少年少女や袴姿の女子大生の華やかな笑顔が巷を明るくさせてくれるのですが、今年は新型コロナウイルスの影響で、こうした光景はほとんど見ることができなくなってしまいました。

今からちょうど50年前の3月、私に通っていた都立高校でも卒業式が中止になりました。「桜坂」のほど近くにあった母校では学生運動がさほど激しかったわけではなかったものの、他校からの乱入などを避けるための措置でした。

当日は、クラスごとに教室で担任教諭から卒業証書を渡され、校歌を歌うこともなく同期生たちと別れましたが、卒業してから数十年後に開催された同期会当日、出席された先生が即興で卒業証書を読み上げるというサプライズがあり、目頭を熱くさせてくれました。

私が高校を卒業した昭和45年当時は、卒業をテーマや曲名にした歌謡曲はまだ少なく、舟木一夫の『高校

三年生』『学園広場』『仲間たち』あたりが歌われたものでした。海援隊の『贈る言葉』が発売され

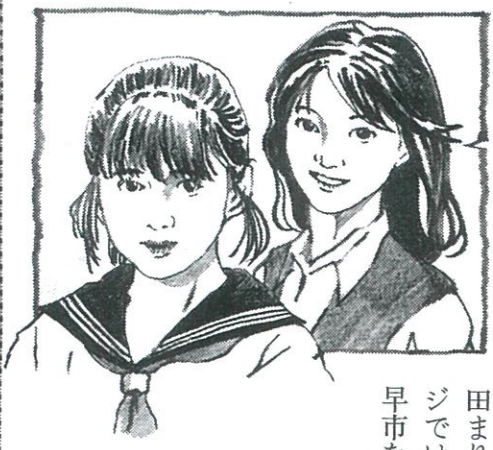


名曲カルテ 昭和歌謡と いままで

堀井六郎
絵・松本浦

たのはドラマ『3年B組金八先生』が放送開始された直後の昭和54年11月で、このあたりから卒業ソングが世の中に登場する頻度が高まってきました。今ではすっかり定着してしまっただけでなく、学生服の第2ボタンを贈る」といった慣習を、一部の風習から日本中の中高生に伝播させたきっかけの一つに、昭和60年2月に発売された斉藤由貴のデビュー曲『卒業』（詞・松本隆、曲・筒美京平）の歌詞の影響もあったようです。

この年は同時期に女性アイドルによる卒業ソングが続けて発売されています。同級生への思慕を歌った、倉沢淳美（欽どこ）のわらべの一人の『卒業』（詞・売野雅勇、曲・林哲司）、都会へ旅立つ恋人を想う、菊池桃子の『卒業—GRADUATION—』（詞・秋元康、曲・林哲司）です。斉藤を加えた美少女三人は、年長から斉藤↓倉沢↓菊池の順に1学年ずつ離れていて、実年齢と自身の高校卒業をオーバーラップさせたのは斉藤由貴でした。



斉藤盤が発売される6年前の昭和54年1月、やはり自身の実年齢と卒業を重ね合わせた曲でデビューを飾ったアイドルがいました。『グラジュエーション』（詞・山上路夫、曲・都倉俊二）の倉田まり子です。当時私は石川ひとみのファンでもあったので、ゴーストライターを依頼された際に、「石川まり子」の筆名を使用していた思い出が甦ります。

昭和60年に起きた投資ジャーナル事件に関連して、心ならずも引退を余儀なくされた倉田ですが、その後、都倉俊一から一文字貰い受けた苗字を本名の坪田に変え、現在はセミナー講師などを養成するプロのカウンセラーとして会社を経営、東京学芸大学などの大学で教鞭を執っているとのこと。今年初めに掲載された「坪田まり子」のホームページでは、故郷の長崎県諫早市を訪れ43年ぶりに小中学校時代の同級生と再会し、大好きだった『グラジュエーション』を旧友たちの前で歌った感激を自らの言葉で綴っています。